と舟に飛乘りければ、さしも疾かりける川波にも、舟は些もせかれず、眞一文字に向の岸に着く。勘十郎、難なく陸へ打上りて、大音聲を揚げ、如何に義光、軍所望に思召さば、此方へ御渡し候へかし。華やかに一軍仕り御目に懸くべく候ものをとあざ笑ひて、彼方の岸に控へたれども、高瀨の波の惡さに、渡の舟もなければ、義光は詮方なく、無念や〳〵と獨言して呟き乍ら、山形へ歸られけるが、頓て氏江尾張守を近付けて、能々物を案ずるに、羽島を安く討たんには、彼川に淺瀨の出來次第、夜の間に先陣を渡して、陣を張らせ、其より少し引退きて、此方の深草の中に、鐵炮の上手を、二十餘人隱し置くべし。さあらば、例の機早なる若者、猶豫もせず正先に馳せ來らんずるぞ。其時、先陣の勢、矢軍に時を移して颯と引退かば、彼者必定正先にこそ進まんずれ。其時、内々茂みが中に隱し置きたる二十餘挺の鐵炮共、つかい拍子に放し懸けば、などか彼者を、安く討たであるべきぞと密に談合し、先づ鐵炮の手利共を二十餘人勝り出し、堅く相圖をぞ定めらる。其後、彼川の淺瀨も出來ければ、内々謀の如く、密に山形を打出で、夜の間に瀨川を渡して先陣を張らせ、少し間を隔てゝ、深草の底に、件の鐵炮二十餘人の手利共を隱し置き、羽島が寄するをぞ待ち居たる。去程に、夜の間に敵寄せ來り、須川を越して陣取りたる由、羽島が方へ聞えければ、案の如く猶豫ふ氣色もなく、正先に進み來り、暫く矢軍すると見えしが、義光先陣、相圖の如く、立つ足もなく北げ崩れて引退く。此を見て勘十郎、正先に進み、大長刀の柄迄、鐵を延付に拵へたるを、打振り〳〵懸りけるを、茂みが中に隱し置きたる鐵炮共、すは内々相圖の時刻よと、矢長を能々見濟し、同時に放し懸けゝれば、無慙や勘十郎、鞍の前輪より、後輪かけて打脱かれければ、手は痛手なり、馬は頻に跳ね上る。既に鞍坪に怺り兼ねて見えしかども、さしも剛なる者なれば、馬の頭を引返して、我陣に歸りけるが、其日、暮程に、終に墓なくなりぬ。義光、此由を傳へ聞き、無慙や、可惜(あたら)若者の犬死したるよな。軍に功ある者ならば、寒河江の城に楯籠りて、最上川を前に當て、居ながら防ぎ戰はゞ、斯く不覺の死をばすまじき者をとて惜まれける。去程に、義光、谷地・寒河江の兩鄕を、不日に押領せられ、逐日威勢彌増りければ、又、八沼の城へ押寄せ、貴志美濃守を攻めらる。城は小さし勢も少なければ、安々と攻落さん事、案の

內なりと思ひ、攻具足の用意もなく、只一息に揉落さんと、大勢にて早りけれども、城中にも、小關加左衞門尉などいふ强弓の精兵共、差詰め引詰め、矢を散々に射懸け、手負・死人矢場に大勢出來ければ、いや〱、此城の爲體、一旦に落つべうも覺えず。　今日は暫く引退きて、向陣を堅く取り、攻具足を用意してこそ攻むべしとて、寄手少々引退く處を、城中より見濟し、追縋うて討つて出でけるが、其中に氷魚緘の鎧着、大長刀を馬手の脇に搔込うで、鹿毛なる馬の逞しきに乘りたる武者一騎、馬を小躍させて寄せ來る。　義光、此武者を目に懸け、天晴敵よといひもあへず、馬を一三に駈出されけるを、傍(あたり)に居合せたる郞從共、こは如何にとて、鎧の袖に縋りけれども、ためず振捨てゝ馳寄せ、いつも放さず持たれける鐵の棒を振擧げて、健に打たれけるに、無慙やな、唯一打に怺り兼ねて、鞍坪より正倒に落ちたりければ、義光馬より飛んで下り、首搔落されたる處に、氏江尾張守馳せ來りて、あら不覺の大將の御擧動や候。　其首取つて、誰に見せ、何の高名とやいはれ給はん、今の御心樣にては、何れの日、何時か合はぬ敵の手の下にて、殿の犬死し給はんを見聞かん事の心憂や・目の當り、此程、羽島が擧動を笑ひ給ふ御詞に似もせず、今の言甲斐なさよと、淚と共に申しければ、義光、慙しげにて詞もなく、持ちたる首を投捨てらる。　大將さへ斯る擧動なれば、增して二千餘騎の兵共、我も〱と入亂れて、四方八方を破り立て、追廻して切つて廻れば、敵、立足もなく城中へ北げ入りけるを、寄手追縋りて切つて懸れば、北ぐる者は大勢なり、城戸は狹し、詮方もなく左右へ開き靡きて、散々になりけれども、大將美濃守を始め、郞等小關加左衞門尉等二千餘人、城戸口にて返し合せ、手痛く軍すれば、寄手も少し疼みたる隙に、敵は仔細なく城中へ引いて入る。　去れども終には怺へ兼ねて、降人となりて出でぬ。　義光、又天童某を攻められけれども、敵、要害に支へて防ぎ戰ひければ、寄手向城を取りて、數日を送りけるが、或日敵、大勢にて、千手堂へ打つて出づれば、寄手も折の幸よと喜び、猶豫もなく馳向うて軍する。志村九郞兵衞尉・天栢相模守二人、手の者共を引具して、田の畔を傳ひ、横合より駈破れば、敵は怺へ兼ねて、右往左往に北げ崩る中に、野邊澤能登守とて、大力人に勝れたる剛の者ありけるが、下には鎖帷子を着て、上に黑糸緘の鎧を着、五尺一寸に鍛へて

打つたる鐵の棒を、馬手の肩に打擔ぎ、月毛なる馬の長に飽きたるに打乘り、大手の門より、馬を靜に歩ませて、開き靡きたる味方の中を、駈分け〳〵進み來る。寄手の陣に、安間の何某とて、此頃、羽黑山に住居し、大力世を得たる者のありけるが、何の能登守が、事々しの出立樣や。餘りに傍若無人にこそ覺えたれ。何條彼者なればとて、鬼神にてもあらばこそ。思ふ程一當あてゝ、雌雄を見せんものをと自賛し乍ら、猶豫もなく打つて懸りけるを、能登守、此由を見て、馬の首を馬手の方へ引側め、安間を弓手に見なして、靜に駈寄り、件の鐵棒を振上げ、手反を打つよと見えしが、無慙や安間は、頸の骨、微塵に打碎かれて、二の息もなく死してけり。此勢に辟易して、向ふ敵もなければ、能登守は靜に馬を控へ、腹帶を縮めて居たりける處に、寄手の陣の中より、年の程十六七の若者、只一騎進み出で、能登守が甲の眞甲を、二打三打うちけれども、さらぬ體にて、心靜に腹帶を縮め、鞍坪に居直り乍ら、和殿は、敵に取りても何人ぞ。名乘れ聞かうといひければ、本間左馬助が嫡子同七郎、歲は十七歲になるぞと名乘る。能登守打聞きて、扨も優にやさしく候。和殿、此にて討進らすべけれども、手に合はぬ若武者なれば、左右なく助けて申候ぞとて、馬引返しければ、七郎も不思議に虎口の難を遁れ、味方の陣へ歸りけるを、傍輩共此由を見て、御邊が小腕にて、あの大力の能登守を、いかで討取られなんぞとて、あざ笑ひければ、七郎聞きて、いやのう、譬ひ能登守なればとて、腕をだに安く打落しなば、など首を掻くには仔細の候はんやとぞ會釋しける。去程に、義光、能登守が擧動を見聞きて、彼者があらん間は、中々天童を押領する事なり難かるべし。所詮如何にも方便りて、彼者を味方になさばやと、氏江尾張守に談合し、向後は御邊の息、又五郎を聟にして、親しうなるべう候と、義光自筆の文を書きて遣されければ、能登守、此こそ弓矢取る身の名譽なりと、斜ならず喜び、頓て義光に心を傾けてより、主の天童も、始終悚へ難く思ひ大崎指して落ちて行く。又上山滿兼といふ者は、義光の伯母聟なれども、內々中不和なれば、所詮伊達輝宗と一味し、いかにも方便りて義光を亡し、新恩にも預らばやと思ふ心、出で來にければ、郎等里見內藏助・同越後守等に談合して、思ふ仔細を、輝宗の方へ言遣しけるに、輝宗、一議にも及ばず同心して、頓て義光退治の爲め、不日に

山形へ發向せらるゝの由風聞す。義光、此由を傳へ聞きて、家の子の伊良子宗牛とて、心剛なる老武者のありけるを、密に近付け、汝は急ぎて成澤へ馳せ行き、道忠と心を合せて用心せよ。譬ひ不日に、しれ者共が寄せたればとて、構へて早りの儘に軍仕損じて、敵に利ばし付くるなと、仔細を堅く言含めて遣しける。去程に、輝宗、內々滿兼と談合の如く、大勢を率して、輕井澤へ打出で、案內者に、成澤の爲體を懇に尋ね、滿兼に對して、抑彼城には、元より七旬に及びたる道忠を置き乍ら、又同樣なる老武者の宗牛を、重ねて差添へたる由。倩義光が思案の程を推量するに、若武者は、時時早りの儘に、楚忽なる軍をもするなれば、斯る剛なる老武者共を入置き、堅く城を守らせて、徒に日數を送らば、寄手必定怺へ兼ねて深入すべし。其時義光、不意に後詰して、思ふ樣に駈散らさんと思ふなるべし。其敵の思ふ圖に乘つて、負軍したらんは、無下に口惜しかるべけれども、敵の打つて出でぬ上は、今更に詮方なし。如何にせんと談合せられけるを、滿兼聞きて、さん候、內々存じ候は、某、御邊へ與し進らせ、大勢にて押寄せんずる支度なる由を、義光、承り候はゞ、逆寄に上山迄も打つて出で申すべし。さあらば、此邊の要害に、軍兵を隱し置き、安々と討つて取らんと存じ候に、彼者深く遠慮を廻らし、路次の城々には、軍勢を籠め置き、其身は柏木山の麓なる要害に控へて、罷在る由に候へば、此方より先んじて、爲方なく覺え侍れども、併味方小勢にても候はゞこそ、徒に日を送りて、敵の寄するをも待ち申さんずれ。斯る目に餘る程の大勢が、一軍も仕らで、空しく日數を送りて申さん事、世の聞えも、餘りに言甲斐なく覺え申候間、所詮成澤には、手當の軍勢を殘され、直に柏木山へ御向あつて、一戰に利をだに得られなば、成澤の敵は、何ぞ恐るゝに足らず候と申しければ、輝宗も此儀に同じ、扨は彌滿兼に先陣せさせて、柏木山へ向ひ一軍して、雌雄を決せんと、僉議治定す。義光、此由を傳へ聞きて、さらば手々に軍兵を分けて、寄する敵を防がんとて、先づ七手に分つて陣を張る。其備、先陣は野邊澤能登守、二陣には氏江尾張守等とぞ聞えし。其外、鐵炮二百餘挺を、小泉掃部助・加藤太郎右衛門尉に屬けて、柏木山へ上せ、嶮岨を前に當て、茂みが中にぞ隱し置きける。是は敵來りて、合戰既に半ならん時、本陣にて相圖の太鼓を打つべし。其と等しく山上より、鐵炮を同

時に放し懸けよ。敵、案に相違して、前後に猶豫せんずる處を、一度に噇と駈崩さんとの謀なり。輝宗、敵に斯る方便あるべしとは夢にも知らず、滿兼に先陣せさせ、松原といふ處迄打出で、兩方の先陣、相懸に懸合ひて一軍しけるが、暫く時移れば、互に二陣に讓りて、左右へ分ると見えし程こそあれ、義光の陣にて、相圖の太鼓を打つと齊しく、思ひの外、上の山の茂みが中より、同時に鐵炮を放し懸くれば、寄手、こは如何にと騷ぎて、俄に開き靡く。此由を見て、先に引色に見せたる野邊澤能登守、正先に取つて返し、例の祕藏の鐵棒を提げて、一陣に進めば、飯田小十郎も、引續きて打つて懸る。是を見て、二陣に控へたる氏江尾張守が手の者共、我先にと喚いて懸れば、寄手、是を會釋し兼ね、先陣も後陣も、同時に敗れける處を、山形勢勝に乘つて、手緊しく追懸くれば、輝宗も、度々危く見えられけれども、郎從等、此を先途と、防矢射ける其隙に、這々上の山迄引返さる。斯る處に、女の輿昇せて、長井の方より來るあり。是は輝宗の簾中、義光の妹なるが、兩家故なく中惡くなり、既に軍ある由を聞き給ひて、こは如何にと胸打騷ぎ、餘りに悶えられければ、使していふ迄もなく、女性自ら來り給へり。斯くて輝宗に對面せられ、あな心憂や、父義守の最後の時、御身を枕許へ呼び進らせ、向後義光と中惡うして、人に笑はれ給ふな。伊達と最上が一になり、水と魚との如くにて渡らせ給はゞ、譬ひ上杉・佐竹等が、何程の事を思ひたりとも、如何に恐るゝ事の候はん。其內、政宗が成人して、一方の大將にもなる程ならば、凡そ出羽・奥州の內には、手指す者も候ふまじ。構へて此事を忘れ給ひそと、泣々申されたる其言の葉を、いつの程にか忘れ給ひ、難面（つれな）くも渡らせ給ふものかな。よし／＼、此事思ひ止り給はずば、先づ自らを害し給へ。死しての後は用もなし、生き乍ら憂目を見せ給ふ事こそ、越（こよ）なう恨めしう候と、泣き口說きてかこたれければ、輝宗も、女房の恨の程は、理過ぎて覺え、殊に負軍はしたり、萬づ無興氣にて、翌日長井へ歸られける。

義光は、斯く長井・上の山の敵をば安々追返し、郎從氏江尾張守・伊良子宗牛二人の者を近付けて、今度滿兼・輝宗が負軍して、臆病神の付きたるを、不意に押寄せて討たば、安々と討取るべう覺ゆるなり。此事如何はせんと、密に談合せられけるに、氏江尾張守が申しけるは、仰畏つて候。併滿兼、軍に利なくして引かせ給ひ

たればとて、家の子に里見内藏助・同越後守・其子民部少輔等を始め、其外、剛の者共、數多御座候へば、譬ひ小勢に御座候へばとて、輙う攻落すべうも不ㇾ存候。結句攻倦んで、日數を送る内に、輝宗、隙を窺ひて後詰し給はゞ、勇々しき御大事にも罷なるべうもや候。つく〴〵と愚案を運らし候に、某が郎等にて御座候者の弟、出家して數年上山に罷在候が、日頃、里見兄弟が許へ立寄り、親しう相馴れて、心根をも大概存じたる由に御座候が、兄なる内藏助は、内々淳（すなほ）にして、萬づ擧動の、義に合はん事をのみ、心に懸くる者にて候。弟の越後守は、飽く迄欲心深くして、假にも威勢を好む者にて御座候由、常々承り候間、彼越後守が許へ、如何にもして、御味方にだに參らば、所領は所望に任せらるべきの由、仰せられなば、大方は御味方に參るべう覺えて候。彼者さへ、御味方に參りなば、滿兼をば、仔細なく討進らせらるべう候と申せば、義光、さあらば其事、便宜に付きて、計り候へと會釋せられければ、氏江、件の僧を呼寄せ、御邊を强ちに賴み進らせ候間、爾々の樣に會釋し、先づ内藏助兄弟が氣色を伺ひ、重ねて其由を告げられ候へ。始終は、御邊が爲も宜しう候はんぞとて、密に打語りければ、彼僧、頓て里見内藏助が許へ行きて、内々氏江が敎へたる樣に、愚僧は所緣の仔細御座候て、氏江尾張守の許へ、折々音信候が、昨日爾々の由、承り候と、何氣なく語りければ、内藏助聞きて、さればとよ、内々は長井の輝宗を、さりともと賴み思ふ處に、此程、柏木山の軍に因つて、彼簾中の恨の程の深ければ、心ならず最上と御中直り候上は、此當家の無勢を以て、義光を敵とし進らせ、如何末々迄怺ふべうも覺えねども、今更爲方もあらねば、所詮の存亡は、滿兼公と諸共に、思ひ定めて候よなどのみ會釋して、誠、餘儀ありとも見えねば、僧は、いや〳〵、憖に言過して、推量早き男に心付かれては、結句大事の基なるべしと思ひ、事を左右に寄せて、立歸り、直に越後守が許へ立寄りて、打解けて四方山の物語しける次に、されば此程、山形の氏江尾張殿、爾々なる物語の候。愚僧は所緣の候うて、常々立寄り候が、此頃參りたる時、餘所乍らこそ承りて候へと、何心なげに語りけるを、越後守打聞きて、さればこそ、味方の斯る無勢にて、山形の大勢を引受け、いかで半日も怺へ候ふべき。譬へば輝宗と一味なる時なればとて、間を隔てたれば、不時の用には立つべからず。まして此

頃、伊達と最上と和睦のありつる上は、迚も叶ひ給はぬ道に、御家を亡し給はんより、義光へ降參なされ候へ。　元より外ならぬ御中なれば、何か苦しう候ふべきと、度々意見申しけれども、承引なければ力なし。　所詮當家滅亡し給ふべき時到りぬと覺え候へば、由なき人の方人して犬死せんこそ、命も惜う候へども、年來の主を見捨てゝ降參し、不當のしれ者よと、不祥（さが）なき口にいはれんも、流石口惜しからんと思ふ心計なるぞと、穩便に語りければ、件の僧、さらば次（ついで）惡からずと思ひ、何角と、彼の男の心行くべき樣に語りなし、さらぬ體に會釋して立歸り、直に山形へ行きて、氏江に對面し、里見兄弟が會釋、爾々なる由を語りければ、氏江頓て、伊良子宗牛を打連れて、義光の前へ出で、彼の僧が物語を密に披露す。　是に因つて義光、件の僧を召寄せ、銀子十枚引出物し、猶々向後の事、善き樣に賴み候ぞとて、自ら文を細々と書きて、越後守が許へ遣られければ、僧は急ぎ上の山へ歸り、越後守が許へ行きて、されば思の外なる事の候ものかな。　先日愚僧が參りて候時、世の中の事共、御邊の御物語候を、外ながら承りて候由、山形にて、氏江殿に、何事となく語りて候へば、直宿（とむる）申されける次（ついで）、義光へ御物語候由にて、則ち義光自筆の御文なりとて、御邊へ參りて候ぞとて、密に渡しければ、越後守、此文を聞きて見るに、如何にも方便りて滿兼を討ち、味方に屬かせられば、彼人の所領の分は、相違なく御邊へ進らせ候はんの由、細々と書かれたり。　倩世の中の人の心を見聞くに、昔が今に至る迄、貪欲深き者の心程、賴まれぬ者はあらじ。　越後守、此文を見るより早や心空になりて、天晴此上は、方便りて滿兼を殺し、先祖にも聞かぬ所領の主と仰がれんと、根深く思入りければ、いと嬉しげに打笑ひ、さてのう、今の世に、義光公なんどより、斯る御文給はらん事、弓矢の冥加にあらずんば、斯るべしとも覺え侍らず。　併且は貴僧の御厚恩と覺え候とて、喜の餘り、白布十端引出物し、されば世の中の事、壁に耳、岩の物いふとこそ申すぞ、事延々にして、自然泄れ聞えなば、勇々しき身の大事に候間、此上は片時も早く企て候はんぞ。　御邊は又山形へ御歸り、さりぬべからん侍を一人、此方へ御越し候へ。　隱謀の始終を、便宜に付きて談合仕るべう候由、某が申條に候と、御申候へとて、僧をば山形へぞ返しける。　あな淺猿しとて、棄恩入無爲の敎に從つて、彝倫を廢つる身となら

ば、せめて木食草衣して、邪慢名聞の無執をも止むべぎに、何ぞ此僧の愸に、法體染衣の名を借りて、斯る君臣の大綱に戻れる隱謀の使しける事よ。誠、唾吐き爪彈すべき擧動ぞかし。されば思の外、兩方より引出物をば得つ。いと心地よげに頭を掉りて、急ぎ山形へ戻り、越後守が申條、爾々に候と、賢げに語れば、義光、頓て矢栢相模守に、始終の事共を懇に言含め、世上へは、彼者此程所勞あるに付きて、湯治する由披露して、上の山へぞ遣しける。去程に、越後、矢栢に對面し、事の始終を一々に談合して、兄の內藏助を召寄せ、此に思の外なる事の出來候。義光、我等兄弟に、爾爾の隱謀賴み思召すの由にて、此に御渡り候。矢栢殿を御使に差越されて候は、如何御計らひ候ふべきといひも果てぬに、內藏助、いや〳〵、御邊は兎いへ角いへ、我等は露程も心行かぬものを。さある使なんどには、所詮一座の對面も詮なく候へば、罷立候とて、以の外、氣色損じ、蹴散らして立つ處を、內々定め置きたる者共、中に把つて搔抱き、些とも働かせず刺殺す。さて此上は、時を移して、自然滿兼に聞付けられては如何にせん。今夜の內に方便りて、彼人をも失はんとて、年來滿兼が近習の侍佐竹平內といふ者、越後に常々親しかりければ、密に彼者を語らひけるに、淺猿しや此男、天性義理の公私に暗かりければ、僅朋友の微志を守りて、大に君臣の綱領を忘れ、終に賴まれければ、扨は夜陰に及びて、城中に忍び入り、滿兼を殺すべし。さるに付きては、爾々に事を計り候へと、便宜に付きて、能々相圖を定め、其上彌、此事違變ばしすなと、堅く誓紙を書かせてけり。斯くて夜も更過ぎ、期したる時刻にもなりぬれば、里見、矢栢を相具して、只二人、城中へ忍入りけるが、內々平內が約束にて、妻戶の懸金を、宵よりかけねば、二人の者は安々と、滿兼が寢たる一間處へ忍び入りて見れば、無慙や滿兼は、痛く睡り居て、遠侍に直宿したる者共も、高鼾して伏したりければ、痛はしや里見、音もせで滿兼を刺殺し、さては此事、仕濟ましたりと打囁きて、二人の者は、仔細なく城を忍び出でぬ。斯くて夜も明けぬれば、あな淺猿し、何者の業にや、滿兼、今夜闇討にせられ給ひたりとて、上下手に足を交へて、周章て騷ぎけるを、惡くも里見が重恩の主と同胞の兄とを、夜の間に殺し、其方樣なる人々の、淚を流し嘆き侘びぬるを、己はいと嬉しげに空笑して、傍輩の面々に使を立て、滿兼、

此頃義光に逆意し給ふに付きて、某、餘儀もなく賴まれ進らせ、義の專なる處、默し難ければ、滿兼公を始め、無慙や兄の內藏助迄、某が討ち申して候。此上は面々も故なく命を捨て、世を厭ひても詮なければ、早々我屋へ馳せ集り、義光の御名代として、矢栢相模殿の、我屋に御座したるに見參せよかしと觸れたりけるに、あな淺猿し、皆々里見が宿處へ集り、おめ〳〵と頭を下げ手を束ねて、矢栢が前にぞ畏りける。是に付けても、思ひ合はする事の侍る。泗水飛沈周寶鼎、灞城遏住漢銅人、人心不ㇾ似無情物、多少英雄入二魏秦一と作りたる詩人の諷刺、昔も今も定めなき、人の心ぞ淺猿しき。されば往昔平治の頃、尾張國長田庄司といはれし者、平家に賴まれ、主の義朝と、聟の鎌田が首を切り、四百餘年の今に至る迄、靑史に汚名を遺され、人々に唾吐き爪彈せられて、永く恥を曝す事、目の傍なるに、何ぞ越後が、譜代重恩の主と、骨肉同胞の兄の首とを切つて、己が榮耀に誇らんと企てけるは、能々所領は、欲しき者にこそあるなんめりと、貴賤上下、指して惡まぬ者はなかりしとなり。去程に、里見・矢栢二人の者は、急ぎ山形へ行きて、爾々に相計り申したる由、披露しければ、義光、

見參ありて、斜ならず喜び、矢栢にも忠賞を行ひ、里見には、約束の如く、滿兼所領の分、相違なく恩賞に充行はれければ、俄に邯鄲の夢見し人の心地して、頓て上の山へ所知入し、兄の內藏助が二歲になる子の、母の許にありけるを搜し出して殺さんと、樣々に尋ねけれども、母は、夫の內藏助も、弟の越後に討たれたる由、聞くよりも、此子をも助けじと思へば、泣々迷ひ出でて、成澤といふ處へ落ち行き、安養寺といふ寺に忍びて居たりけるに、住持の僧、懇に勞りて、彼孤を、自ら懷の內に抱へて、大崎の方へ落ち行き、所緣のありけるに、預けて養はせけるが、いつしか年月數積り、力量人に趣えて成長しければ、あらぬ樣に心を碎きて、父の仇を報じ、世に名を顯しける里見勘四郞是なり。去程に、義光、打續きて剛敵を亡し、近隣を押領して、國中大方靡き從ひけるに、佐々木典膳とて、其頃十六歲になる若者の、金山城に居たりけるを、降參せよと、每度催促せられけれども、思の外に會釋して、終に降參せざりければ、義光、頓て押寄せ、盡く在家を燒散らして、側なる山へ取上り、暫く城の爲體を窺はれけるに、三方は岩石高く峙ち、一方は鮭延川なれば、地の利、形の如く嶮岨にして、何と

攻めたりとも、一旦に落つべうも覺えねば、所詮向城を堅く取りて、敵を兵糧に疲らかし、弊に乘つて攻落すべしと僉議し、鮭延川の方、一方計開けて、三方に堅く向陣を取り、用心緊しく打守りて、數日を送りけるが、元より城中の用水乏しければ、夜な夜な忍びて人を出し、鮭延川より水を汲ませける。寄手、此由を見付け、是こそ究竟の事よ。彼川邊に堅く張番を置きて、敵に水を汲ませずば、終に渇に退屈して、落ちて行くか降參するか、よも久しくは怺ふべからずとて、宵より忍びに足輕を出し、隱し置きたりけるを、敵、是を夢にも知らず、夜半計に、城中より人夫を出して、水を汲まする處を、内々隱れ居たる者共、ぱつと起き立ちて、水汲む者一人も殘らず討取りてけり。典膳、之を安からぬ事に思ひければ、數日を經て後、前の如く忍びやかに水汲を出し、其跡に、侍百餘人を從へて、隱し置きけるを、此頃、氣をつめて、張番に居たる寄手の者共、すは例の事よ、慰に首共取つて、大將の御感に預り、此頃の眠さ忘れんよとて、同時にぱつと追立てけるを、跡に控へて、隱れ居たる百餘人の者共、兩方より二手に分つて、拔連れて切つて懸れば、寄手、思の外散々に追散らされ、物音のいと騷しかりしを、寄手の陣に、武田兵庫頭一人、此由を聞付け、猶豫もせず駈出で、大勢に取籠められて、終に討たれぬ。義光、此由を聞きて、あな無慙や、今四五日が間に、領(えり)を伸べて、降人に出でんずる敵と見ながら、由なき小事に目を懸けて、棟徒の者を討たせけるよな。向後は、譬ひ敵、一同に打つて出でたりとも、寄手は柵より外へ、一人も出づべからずと、堅く法を置きて、用心緊しう守られける。是に付きて、城中彌氣疲れ、兵糧も盡きければ、此頃は牛を屠り馬の肉を割きて、一旦の飢を扶くれども、斯くては敵にも逢はで、徒に飢ゑ死なん命の、せめて太刀打する力のある内に、面々一同に切つて出で、思ふ程一軍して、死なんものをと僉議して、或時、大手の門を開かせ、一同に打出でけれども、寄手は内々緊しく法を置きたりければ、只陣々に鏃を揃へ、筒口を並べて、其陰に色々の旗差連ね、思々の鎧著たる武者共、袖と袖とをゆり合せて、大勢支へ、一人も柵より外へ駈出づる者もなければ、いや〳〵、平場ならばこそ駈合せて、思ふ程の軍すべけれども、敵は柵の彼方に控へたれば、愁に柵を引破らんとして、猶豫せんずる處を、眼を休め機を扶け、待懸け居たる矢先にて、撰討

に討たれなば、必定敵の面をも見て、犬死せんも口惜し。所詮城中へ歸りて、如何樣術を替へて、討つて出づべしと僉議して、直に城中へ引いて入りけるが、其中に某といふ者進み出で、寄手思の外、多勢にて候へば、譬ひ重ねて打つて出でたりとも、味方此頃、機疲れたる上なれば、迚も墓々しき軍すべしとも覺えねば、所詮今夜の闇紛に、殿を舟に載せ進らせ、鮭延川を下りに、庄内へ落し申し、後日の時を待つより餘儀あるべしとも不存候と申しければ、上下此議に一同して、夜に入れば、小舟少々用意して、面々込乘り、大寶寺光安を賴みに、庄內指して落行きける。寄手の夜廻する者、此由を見付け、敵、何地へか、只今落行き申候と覺えて、鮭延川に松明少々ほの見え、物音の忍びやかに聞え候ぞと、本陣へ告げたりけるに、義光、此由を聞召して、實にさもありぬべしとのみ會釋せらる。何事なく其夜をば明し、明る晨、寄手の面々、城中へ打入りて見るに、只瘦せ疲れたる馬計四五匹立並びて、人は一人も見えず。此由を見ける者共、あな無念や、敵、是程迄飢に疲れたりと知りなば、押寄せて安々と、薙捨てんものをと、口々にいひけるを、義光聞召して、我は斯くあらんと、疾に推量しけれども、此典膳、未だ年に足らぬ者の、此程の擧動、拔群に覺えたり。まして老の末、何程の剛の者にかなりぬべからんと思へば、何とか會釋して命を助け置き、終には味方に屬せしめんと思ふ故、斯く延々に會釋したり。さぞ光安を便に、庄內へ落行きたるならんぞと宣ひける。後に義光隨一の郎從鮭延越前守是なり。去程に義光、鮭延の邊迄、早や手に屬しければ、如何にもして、庄內の光安を討たんと思ふ心や付きけん、或日、草刈備前守を、一間處へ呼寄せ、時移りて久しかりけるが、翌年の春の頃より、備前、俄に雅意を擧動ひ、義光、常々殺生禁斷の山川寺社ともいはず狩廻り、樣々の惡行を擧動ひけるを、義光聞きて、何ぞ彼者、さながら狂亂にもあらで、斯る條、其科輕からずと雖も、併去年、嫡子武田兵庫頭が忠死したるに免じて、一命をば助くるなりとて、盡く所帶を沒收し、何國ともなく追出さる。備前は力及ばず、庄內へ辿り行きて、光安に、事の仔細を嘆き申せば、光安、疑ふ處もなく、近習に奉公の身となしけるが、天性賢々しき男なれば、いつしか、光安心を免し、年來奉公の者よりも、猶置く心もなく見えける。彼光安は、世に庄內の惡屋形と名を呼ばれ、專ら勇をの

み先として、慈愛の心なければ、萬づ情なき擧動のみ多かりける。其頃、光安が家の子に、中務とて、常に親しう仕ふ侍あり。彼者、十二三歳なる一子のありけるを、僅僻事ありとて、光安、手づから刺殺しければ、中務、世に越えて恨めしき事に思ひ、愁傷の餘り、病氣と披露して、所領なる高坂といふ處へ籠居しけれども、光安、元來腹惡き者なれば、勘當したる中務に親しみ、後日に返り聞えては、身の上如何あらんと、互に恐をなし、事問ふ者もなく、唯思ふ同志打囁きて、眉を皺め、あら賴みなや中務は、殿に累年の奉公を究めたる者の、殊に萬づ分く心なく、幼き者をだに斯る上は、さながら人の上とは思はれぬものを。誰が身の上に、何樣の事にてか、無體に辛き目をや見んずらんと、寄合ひ〳〵疎みけるを、備前は空知らぬ振にて、世の中の爲體を見聞かぬは、是こそ事の幸よ。此を次に、內々巧みたる隱謀の功をなさんと、屹と思ひ含み、時々忍びやかに、中務が宿處へ音信れ、憂さを慰む物語などして、置心なげに勞はりければ、中務は嬉しき事にのみ思ひて、常よりも猶親しうぞ會釋ひける。或時雨、しめやかに降りて、氣色いと哀れなる夕間暮、備前、竹葉など携へ、中務が許へ辿り行きて、今夜御徒然の程、さこそ佗しうも御座すらめと、痛はしく思ひ進らせ候へば、世に恐ある事にし侍れども、又もや參りて候。穴賢、人にな知らせ給ひそとて、竹葉取出し、一獻を勸め、互に心の移り行く事共、物語しけるが、折節の氣色に付きて、中務、のう如何に備前殿誠やらん。此頃迄、御邊の主君にて御座しける出羽守殿こそ、御心樣も勇に、才智も世に越え、萬づ慈悲深き大將にて御座すと承り候はと、打語りければ、備前、さん候、先君なれば、些しは片贔負にも、斯く申すと思ひ給ふべけれども、此頃、世間に沙汰しける樣に、國中を打從へて、武勇は人に勝れ、就中慈悲深くして諸士を深く勞はり、譬へば親の子を哀れむ樣にこそなし給へ。次（ついで）なれば、申すにて候。當殿の御事、申すは如何に候へども、昨日今日の某、御緣にもや候。思の外御心に叶ひ、召仕はれ侍ると雖も、年來舊功の御邊の上を見るからは、全く外の事とは覺え侍らず。何の日の何の時か、我身の上に廻り來て、故なき事に命を失ひ侍らんと存じ候へば、一入御邊の御事を、痛はしく存じ候故、人目を忍び問ひ慰め候、穴賢々々と、隔つる心もなげに、打萎れて語りければ、其時中務、顏差寄せて、のう備

前殿、斯く申せば、御邊の御心も、いと愧しう候へども、殿の餘りに難面う候へば、申
すにて候。某は殿の幼少の頃より、身を捨てゝ奉公申し、今庄内の屋形と、人々仰ぎ
申すも、數ならぬ中務が擧動の、いみじう候故なり。然るに其甲斐もなく、斯る憂目
を見せ給ふ事、物に勝れて、恨めしう覺えて候。就中備前殿、物の心を能く聞き給へ。
平生殿の御心樣、生得の剛なるに任せて、少しも慈悲の心なく、剩へ愚にして智惠御
座さねば、稀にも御身の非を揚げて、諫め申す者あれば、科なきに罰を行ひ、或は籠
居せしめ給へば、正直なるは自ら疎く、邪曲なるは日々に時めいて、己が樣々の愚意
に任せて、沙汰するに因つて、諸民混、恨をのみ含みて、上下心々なれば、さこそ行末、
墓々しき事はあるまじ。終には家の滅亡、目の前なりと存じ候へば、中々に命を諸
民の爲めに捨て、野心を企て、義光に味方し進らせ、某、案内仕らば、一味せんずる者
も、數多出來候はんぞ。所詮便宜に付きて、御計り候へかし、穴賢々々と、餘儀もな
げに語らひける。備前、此三四年が間、巧に隱謀を含みて、事の便宜を窺ひければ、
是こそ此頃の素懷を遂げんずる時到りぬと喜び、扨のう、御邊のさ仰せ候こそ、理過
ぎて覺え侍る。さあらば、不日に隱謀を、同志に御語らひ候へ。某、隱密に山形へ註
進致し、事の始終を牒じ合せ候べし。倩、愚案の程を申すに、此事既に議定し、義光、此
方へ發向せらるゝ由に候はゞ、殿は始終の遠慮淺き御心樣にて候へば、必定早りの
儘に、大山を出で給ひ、中途にての軍を、御心に懸けらるべう候。其時御邊は、案内者
にて御座すなれば、城中へ入りて、同時に火を懸け給へ。其時、隱謀の一味の人人、後
より揉に揉んで攻め申さば、殿を何處へ遁し進らせ申すべき。誠、筋なき逆意の企
と申し乍ら、常々殿の極惡積らせ給へば、是ぞ一敵多生の敎に任せ、諸民を土炭〔塗〕の中
に救ふ謀にてもや候はんとこそ存じ候へと、會釋もなくいひければ、中務は打俛れ
て、暫く物をもいはざりけるが、漸くありて、御邊の仰候條、一々圖に當りて覺え候。
所詮始終を運に任せ、此隱謀を企て候べしとて、便宜に付きて、一族他門を語らひけ
るに、あな淺猿しや、渡りに舟を待ち得たる樣に、猶豫もなく一味したりければ、面々
に起請文を書かせて、始終違變なき樣に堅く約し、備前が方より、此邊爾々の由、山形
へ註進したりければ、義光、斯る上は、時日を移すべからずとて、頓て大勢の軍兵を揃

義光光安を攻む

へ、月山ヶ嶽を打越え、松根・黑川の邊迄、打つて出でられけれぱ、內々備前が推したる如く、光安猶豫もせず出向ひて、川を隔てゝ陣を張る。中務は、內々義光と牒じ合せたる事なれば、跡にて大山の城へ馳せ入り、同時に火を懸けゝれば、光安が本陣の者共、こは何事よと、色めき騷ぐ處を、內々隱謀に與したる者共の、先陣にありけるが、同時に旗を、後の方へ向くるよと見ゆる程こそあれ、光安が陣へ向つて、矢を射懸け鐵炮を放し懸け、黑煙を揚げて揉合せければ、川を隔てゝ支へたる本城豐前守が手の者共、一文字に川を渡し、返忠の者共に力を合せんと喚いて懸る。此由を見て、光安が本陣の者共、悚へ兼ねて、散々に敗れければ、痛はしや光安も、漸く續く郞從十四五人を從へ、一里計落行きけれども、案內知つたる手の者共なれば究竟の詰り詰りへ馳散りて、遁さじと支へければ、光安、此由を見て、あな無念や、此頃備前めに心を免し、奴が所爲として、郞從共に方便られたる上は、やはか何國へ落ちぬべうも覺えず。所詮取つて返し、義光が陣へ駈入りて、善からん敵と刺違へんものをとて、馬の頭を引返しけるが、相從ふ者共、今は早や、義光の陣は、一里計も隔り候はん。就中凶徒方々に相支へ、殿を目に懸けて狙ひ申せば、やはか義光が陣の傍へも寄付き申し候まじ。愁に、由なき者の手に懸らせ給ひて、甲斐なく討たれ給はんより、此にて御心靜に御自害御座せ。某等、暫く防ぎ矢仕り、御後より追付き進らせて、死出の山路の御供仕るべう候といひも果てぬに、何處ともなく流矢一つ來りて、光安が弓手の脇坪へ、篦深にぐさと射込みたりければ、無慙や光安、今は是迄ぞ。なからん跡の屍骸をば、如何にもして深く藏め得させよ。さらば之を名殘なりとて、腹十文字に掻破り、路徑の露と消えにける。備前は此三四年が間、心を碎きて方便りたる隱謀なれば、いと嬉しげに馳廻りて、光安が首を搜し出し、義光の實檢に備へぬ。斯くて義光は、備前守を案內者として、酒田の城へ打入り、其後、備前守に、今度の忠賞を充行はれ、中務にも、本領竝に光安が資財雜具を給はりけるに、中務が申しけるは、某齡既に六旬に餘り申したるものゝ、跡を續ぎ申すべき一子とても、御座候はぬ身にて、斯く方便りて年來の主君を殺し、何の世の榮耀にか誇り申すべき。今度不忠不義の擧動仕り候事、全く身の後榮の爲にて御座候はず。偏に諸民の苦を哀れに存じ

光安自盡

たる計にて御座候とて、終に濃き墨染に樣を替へ、出家行脚の身となりて、大和國金峯山の下へ引籠り、行年八十歲にして、身まかりしとかや。斯くて義光、鴨浦といふ處に一寺を建て、光安寺と名付けて、所領を數箇所寄附し、長く光安が菩提をぞ弔はれける。去程に義光、東善寺右馬頭に、中山玄蕃丞を差添へて、尾浦の城に置き、成敗を沙汰せさせられけるに、其政法や惡かりけん、地下人悉く背きて、越後國上杉景勝を密に賴み、郎從本城出羽守重長を引入れて、東善寺・中山に、腹を切らせんと方便りける。此事、頓て洩れ聞えければ、二人が許より早馬を以て、此邊爾々の事にて候と、山形へ註進したり。是に付きて義光も、不日に後詰せらるべし。其内二人の者共に、力を合せ候へと下知して、先づ草岡虎之助を遣す。去程に草岡は、夜を日に續ぎて尾浦の城へ馳着き、東善寺・中山に對面し、義光爾々の御下知にて候と、二人の者に言含め、樣々に軍の評定しけるが、右馬頭、虎之助に向つて、のう如何に草岡殿、熟（つら〳〵）事の始終を案じ候に、斯く地下人等、案内者になり、敵、大勢にて寄せ來り候ては、味方千に一つも、軍に討勝つべしとも覺えず候。さあるに面々が妻子を、此儘城中に置き候ては、案内者の地下人等に、如何樣にか方便られ、面々妻子親族を敵陣に捕はれ、是こそ何某が妻や子供、彼は誰某が老したる父母に候なんど、あらぬ樣に引晒され、憂目を見せ候はん事、目の前なり。又は人々も斯らん事を期したらば、迚も墓々しく軍すべしとも覺えず候。所詮面々が妻子を、中山玄蕃丞に付けて山形へ返し、其後、心涼く思切つて、最後の軍せんと思ふは如何にと申しければ、中山は、此急難に臨みて、いかでさある事や候べきとて、一向に承引せざりけるを、東善寺と草岡と二人して、色々敎訓し、終に面々が妻や子供を、中山一人に付けて、山形へ返しければ、中山は力及ばず、又こそ參り合めとて、泣々引別れけるが、是や限りの名殘とは、後こそ思合せける。去程に玄番丞は、面々が妻子を引具し、月山ヶ嶽・湯殿峠を打越えける時、野伏大勢寄集りて、通さじと支へければ、いや〳〵、案內知らぬ山中の越行く末も、覺束なき茂みが陰より、時々出でて支へられなば、由なき路次に時刻を移して、安く通り得べしとも覺えず。あの向に見えたる山へだに、左右なう取上りなば、凶徒等、細路一筋を大勢揉合ひて追上らんに、など便宜なるべうも覺えず。其時、弱

弱と會釋して、凶徒等の機を疲らかし、惡處にて取つて返し、谷底へ捲り落すべし。構へて事な過ちそと、郎等共に下知し、足早に引きて、山上へ駈上りけるを、案の如く野伏共一處に群り、曳々聲を揚げて攀上りけるを、玄蕃、此由を見て、始の程は、態と弱々と會釋し、此こそ思ふ圖の惡處ぞと思ふ際にて、わつと叫んで取つて返し、大長刀を打振り〳〵、正先に進んで切つて掛りければ、野伏共裏崩れして、皆谷底へ轉び落ち、續いて追上るべしとも見えねば、いや〳〵、凡下の奴原を、長々しく會釋して、由なく機を疲らしても用なし。　而も此は惡處ぞ。　早りて事を仕損ずなと郎從に下知して、足早に引きけるが、其後、路を支ふる野伏共もなければ、安々と、山形の城へぞ歸りける。　斯くて東善寺・草岡は、面々が妻子をば、山形へ返しぬ。　今は何事か思ひ殘す事もなきぞ。　然るに此城計を賴にして、敵陣に取籠められ、墓々しき軍をもせで、言甲斐なく討たれんよりは、遮つて十五里原へ打出で、味方の陣を二手に分け、敵を破るか包まるゝか、何樣十死一生の手痛き軍すべしと、既に僉議を極めるに、味方に隱謀の者共出來て、城中に火を付けゝれば、賴む味方の斯る上は、とても

行末墓々しき事も出來まじと思ひ、萬づ氣怯れして居たりけるに、程もなく敵の本城重長、多勢を引率して寄せ來る。　東善寺・草岡は、內々討死すべしと思定めたる事なれば、中々に手分をもせず、只一手に打連れて、重長が先陣へ、驀直に切つて懸る。寄手、是を會釋し兼ね、左右へ開き靡きければ、猶豫もせず、二陣に續きたる敵を馳破らんと進みけるが、無慙やな、草岡虎之助が乘りたる馬、鐵炮に當つて、頻に跳り上れば、力なく步立になつて、向ふ敵に破つて入り、面も振らず戰ひけるが、處々にて大勢に取籠められ、痛手數多負ひ、五體直(すく)んで合期ならねば、今は雜兵の手に懸らじと思定めて、立ち乍ら腹十文字に搔破り、刀を杖に突きて、すくみ死にぞ死にゝける。　されば今も此原に、草岡の墳といふは、此の亡跡の驗なり。　右馬頭は未だ討たれず、大勢の敵を會釋ひ、駈入り〳〵戰ひけるが、次第に息喘ぎ機疲れて覺えければ、今は是迄と思ひ定め、討たれたる味方の頸を、一つ切つて弓手に提げ、千入(ちしほ)に染みたる刀を、馬手の肩に打擔ぎ、川を一文字に渡りて、重長が陣へ駈入り、某は今日先陣の案內者にて御座候が、敵陣の大將東善寺右馬頭を、あの川端にて討ち申候が、

大將の首にて候へば、急ぎ出羽守殿に實檢せさせ申さん。重長の御陣は、何處にて候やらんと、高聲に訇りければ、有合せたる者共、扨も勇々しき御擧動や候。重長の陣は、彼方に一群大勢の見えたる處にて候と細に敎へ、中を開いてぞ通しける。斯くて右馬頭、眞一文字に、重長が陣へ走り寄せけるに、重長は、先陣軍に討勝ちて、旣に大將虎之助をも討取り、雜兵も殘り少なに討ちなしたる由、聞えければ、今が間に東善寺をも討取らんと、いと心易く思ひ、扇開き遣ひ、四方を見遣りて休み居たる處に、何樣手痛く軍仕たる者よと覺えて、血潮に染みたる刀を肩に打擔ぎ、首一つ手に提げたる武者、東善寺右馬頭が頸取りたるといふ聲して、重長が方へ進み寄りけるが、間近になれば、些式體する振に見え乍ら、つる〳〵と走り寄り、持ちたる首を投懸けて、重長が甲の鉢を、碎くる計り打ちたりければ、鍛に飽きたる甲の筋三間迄殺落し、吹返に餘りたる太刀、左の耳の小脇迄、健に切付くるを、こは如何にしれ者よとて、傍に有合せたる者共、取々に切りたりければ、無慙や右馬頭は、五體寸々にぞなりにける。其後、首を搔落し、能々見るに、大將右馬頭なれば、帶びたる太刀を取添へて、景

勝の實檢に備へぬ。天下御一統の以後、件の右馬頭が太刀を、景勝の許より、相國へ奉られけるを、後に紀伊大納言殿へ讓らせ給ふ。右馬頭といひし御太刀は、是なりとかや。去程に中山玄蕃丞、山形へ歸りて、爾々の由にて、只今參りて候と告げたりければ、義光、安からぬ事に思ひ、急ぎ庄內へ馳向はれけれども、右馬頭・虎之助も討たれて、尾浦の城は、敵に落されたる由、聞えければ、義光、以の外怒り、猶豫なく馳向ひ、討たせたる者共の、弔合戰すべしとて、早られけれども、氏江尾張守、此度は、不日の御進發にて候へば、間を隔て申したる御勢は、未だ參らず、無勢にて御座候に、敵の勝に誇つたる處へ、長途を越えて懸り申しては、軍に利あるべしとも存ぜず候と、强ちに意見すれば、義光も此儀に同ぜられ、山形へぞ歸られける。去れば此頃は、天下盡く亂れて、出羽の按察使も、昔語の名のみなりしがども、義光、斯る武功の勇々しきに因つて、數年が間に、國中を討從へ、出羽守の名にしおうたる繁昌の程ぞ目出度き。

家康上杉討伐の爲め大坂を進發

內府公關東御下向の事

上杉殿謀叛の由、都鄙一同に沙汰して、上下以の外、周章て騷ぎければ、內府公、此由を開召され、扨は彼者一人を誅して、天下を泰山の安きに置かるべしとて、同年六月十六日、攝津國大坂を御立あり、伏見に着かせ給ひて、一日御逗留御座し、萬づ御制法を沙汰し置かる。　御跡の警固には、鳥井彥右衞門尉・內藤彌次右衞門尉・松平主殿助・同五郎左衞門尉・岩間兵庫頭を殘し置かれ、路次の御用心は、參河國刈谷に御座したる水野和泉守殿に牒じ合せ給ふ。　十八日の晝程は、大津の城にて、京極宰相高次に御密談あり。　晩景に及んで、石部の宿に陣し給ひければ、長束大藏大輔父子、御亭に參り、明日は某が水口の館に御陣を召され候へと申上る。　早速御同心あつて、彼等父子に御腰物下されけるが、夜半計に石部を御立ち、夜中に水口を御通りなさる。　翌晩は關の地藏、廿日は四日市場、廿一日には御舟に召され、三河國篠島に着かせ給へば、田中兵部少輔饗膳奉りける。　廿二日の亭午には、池田三左衞門尉が、吉

田の宿に休み給ひ、晩景に及びて、白須賀に陣し給ふ。　明る廿三日には、堀尾信濃守が濱松の城に入らせ給へば、父の帶刀義晴も、御供申さんとて、越前の府中を出で、今日參著して見參し奉る。　斯くて御諚に、今度石田三成が擧動、何樣不審の端多し。汝は急ぎ府中に歸り、石田が所爲を窺ひ候へ。　信濃守は、御供に可候の由、仰出されければ、畏つて領掌申し、府中を指して歸るとて、美濃國の住人加賀野井彌八郎が御味方に參るに、宇藤坂といふ處にて、行逢ひたり。　斯くて廿四日には、懸川の宿に着かせ給ふ。　此城の主山內對馬守、中山といふ處にて、饗應し進らする。　其夜は島田に陣せられ、廿五日の晝程、駿府に入らせ給ふ。　中村式部少輔は病中なれば、輿ながら見參し奉り、其夜は淸見寺に陣し給ふ。　廿六日の晝程は、中村彥左衞門尉が沼津の宿に休み給ひけるに、本多佐渡守・大久保相模守など御迎に參る。　暮るれば三島の宿に入らせ給ひ、小田原・藤澤に二夜を經て、廿九日には、鎌倉の若宮八幡宮に御參詣御座し、明くれば七月朔日には、神奈川に陣し給ひ、二日の日は、程なく武藏國江戶の御館に着かせ給ふ。　斯くて秀忠公を始め進らせ、遍く御評定の後、關東に

家康小山に到着

は、結城・佐竹・佐野・里見の人々を始め、出羽・奥州には、最上・秋田・仙福・南部・津輕・伊達・岩城・相馬・仁加保の人々に至る迄、皆御味方に參るべきの由仰出され、秀忠公は、同十九日に、江戸の御館を御進發あり。內府公は三日御延引あり、同廿一日の日に御進發ありて、會津を指して出張し給ひ、同廿四日の日は、下總國小山の宿に着かせ給ふ。是れ古、右大將奥州進發の佳例なるとぞ聞えし。斯りければ、宇都宮の城に居たる蒲生藤三郎秀行は、此頃の住國なればとて、先陣の案內者になされ、國內氏江の宿迄打出でられければ、那須・伊王野・太田原・福原・葦野の人々も、皆先陣にぞ加はりける。

政宗、義光と、搦手より會津に向ふ事

內府公は、追手より會津へ向はせ給へば、出羽・奥州の諸大名は、二手に引分れて、搦手より馳向ひけるに、伊達左京大夫政宗は、間近き白石の城へ押寄する。會津より、內々此城に入置きたる甘糟備後守は、其先女房の勞ありとて若松へ來り、跡には幼少なる猶子を殘し置きたりけるが、始終怺へ兼ねて城を開きて退きぬ。剩へ女房も死したりければ、之ををかしと思ふ者の所爲にや、

政宗白石城を陷る

備後殿碁にまけたるかめも持たず黒石勝ちて白石はなし

といふ狂歌を、落書にぞしたりける。去程に、政宗、白石の城には、郎從片倉小十郎を入置きて、是より須田大炊之介と横田大學助とが栖籠りたる、福島の城を攻むべしとて、馳向はれける處に、路次にて不意に、運送の小荷駄を敵に奪はれて、伊達累代の竹に止り雀の紋付きたる軍幕を取られぬ。先日白石の城を容易く奪ひたるは、一功なれども、今度故なく累代の幕を奪はれければ、政宗心解けず。今に至つて兩家宿意の濫觴とぞなりぬ。其後、政宗、小坂山に陣を張りて、時々瀨の上へ勢を出し、敵油斷せば、福島を一攻攻めて揉落さんと、常に隙を窺はれければ、內々福島よりも、岡野越後守（其時名左內）・才野道三〔二イ〕・深尾市右衛門尉・安田勘助・郡圖書・志賀與三右衛門尉等六七人を張番に出し、瀨の上に置きけり。或時、政宗、纔の勢を率して打出でられ、兩方入亂れて、散々に攻戰ひ、深尾市右衛門尉・安田勘助・郡圖書助等は、大勢に取籠

められて、所々にて討たれぬ。　岡野越後守は、瀨上川の端にて、物の具花やかに鎧うて、皆具きら／＼しき馬に乘りたる武者の傍近く控へたるを見懸けて、天晴敵よと思ひ、馳竝べて太刀打する處に、敵二三騎、鞭に鐙を合せて助け來れば、いや／＼、多勢に取籠められては叶はじと思ひ、馬の手綱を搔繰り、捨鞭打つて北げたりけるを、跡より追懸け、扨も蓬し、返せ戻せと聲々に罵りけるに、武偏も時ぞ、さいふ口に不淨を食へとぞ惡口し乍ら北げてけり。　後に敵は誰ぞと尋ぬるに、伊達政宗なりしとかや。　又最上山形へ馳集りて勢揃し、義光と一つになつて、會津へ向はんと、支度したる人々には、先づ南部大膳大夫信直・本堂孫七郞・秋田藤太郞・戶澤九郞五郞・六鄕兵庫頭・赤尾津孫次郞・瀧澤刑部少輔・仁加保兵庫頭・岩尾忠兵衞尉・打越孫太郞、彼等が手勢、都合一萬八千餘騎に、義光の嫡男修理大夫義康に、七千餘騎を相添へて、其勢二萬五千餘騎は海道を正直に、上の山・米澤へ懸つて、會津へ亂れ入るべし。　又義光は、密に間道を打越え、便宜に隨つて向ふべしと、既に僉議を相定む。　扨內府公御父子は、野州宇都宮の城に入らせ給ひて、若松の爲體を懇に聞召されけるに、景勝は、何心なげに小鷹狩して、晝夜の遊興を事とし、何樣緩々と打見えたる由、聞えければ、是程互に確執に及びて、大勢の馳下る由を聞き乍ら、景勝、每日小鷹狩して遊ぶ條、是れ何樣隱謀の同士の、後に在るなるべしと、怪しく思召されける處に、案の如く石田治部少輔三成、山陰・山陽・中國・西國の諸大名に牒じ合せて、家康公に謀叛し奉り、江州彥根の城より打つて出づる由、宇都宮へ聞えければ、すは大事の沙汰こそ到來したれ。　此上は世の中、如何あるべしと、御評定取々なりけるが、先づ三男結城秀康卿、幷に御養父晴朝卿に、東八ヶ國の軍勢を相副へて、宇都宮の城に殘し置き進らせ、家康公竝に秀忠公は、急ぎ江戶へ御歸りあつて、三成が擧動を聞召し、其後、攻上らせ給ひ、世の忩劇を鎭め給はんとの御談合とぞ聞ゆ。　蒲生藤三郞秀行の長臣同源左衞門尉、御前に畏り、乍恐倩、愚案の程を申上候に、那須七騎の者共の質を堅く御取りなされ、此城に入置かれて、心易く彼等が勢を合せ、藤三郞が先陣に罷在りて、海道を差塞ぎ申さば、何條景勝を打つて上らせ可申候やと、其事專ら圖に當りて申上げければ、內府公も、いと賴もしう思召され、則ち那須・伊王野・太田原・黑羽・

葦野等が妻子を質に出させ、宇都宮に差置かれ、其外關東の警固の條々、一々に御定ありて、八月朔日には、江戸の御館へ歸らせ給へば、蒲生藤三郎秀行は、氏江の宿の外れに營壘を固め、海道を睨んでぞ支へける。斯くて石田が謀叛に付きて、内府公一先づ江戸へ歸らせ給ふ由、時日を移さず、山形へ聞えければ、此頃、馳集りたる南部・秋田の人々を始め、世の中斯る上は、面々が所領の安否も心許なしとて、義光に相議する迄もなく、皆在處へ引返さんとす。此由、聞えければ、鮭延越前守・里見越後守・野邊澤能登守等、密に義光に囁きけるは、今度石田が謀叛の由を聞くより、南部・秋田の人々を始め、此方へ一味せられたる起請文に相背き、一往の相談もせで、皆々在處へ引返され候由、且は内府公へ叛逆と覺え申候間、急ぎ罷向つて、一支支へ申さんずるものをと申しければ、義光、誠、さる事なれども、併し斯る時節、無體に押留めんとして、自然同士軍に及びては、結句無益の儀なり。今汝等が、それ程に志を一致にして、專ら忠義を存じなば、譬ひ何程の事の出來たりとも、更に恐るゝ事もあるべからざるぞと、一向穩にぞ會釋せられける。爰に金山といふ關處あり。内々丹子與

三右衞門尉といふ老武者を置かれけるが、此程、馳集りたる軍勢の、皆在處へ引返す由を聞付けて、此事、斯るべしとも覺えねば、爾々の仔細なりと、山形へ註進申し、其返答の未だ聞かざる内は、たとひ言甲斐なく討負けて、首を軍門に曝すとも、一支は支へでは叶ふまじとて、堅く木戸を鎖して警固を置き、樣々の支度して待懸けゝれば、此こそ珍事なりとて、面々より使を立て、爾々の事に付きて、皆在處へ歸り候。一向野心の沙汰に候はねば、心易く木戸を開けて、御通し候へと申されければ、與三右衞門、いや〳〵此頃、内府公の御下知に從ひて、山形へ御寄合ひ、堅く御味方あらんずる由、起請文の上、見もせぬ敵に物怖して、斯る御擧動は、一定内府公への逆意と見え候間、存ずる仔細、只今山形へ註進申して、其返答に因つて許可申候間、其内は些と御逗留被成候へ。若し無體に御通り候はゞ、力なし、矢一つ仕らんと、支度致してこそ候へと、不敵に返答したりければ、使者、此彼の爲體を窺ひ見るに、塀裏には、鐵炮の筒先を揃へて數百挺竝べ置き、上の山には、栗栢生茂りたる間に、色々の旗打立て、深山嵐に飜りて、大勢のありげに見ゆるは、何樣木戸を打破りて、無體に通らんとせば、

同時に落し懸らんずる支度ならんと覺え、急ぎ立歸りて、與三右衞門が返答爾々申して、支度も油斷なく見えて候と、一々に語りければ、早り雄の若者共は、事々しや、何條事の候はん。打破りて罷通らんずるものをと、勇み進みけれども、いや〳〵、楚忽に事を仕損じては、向後内府公の聞召されん事も穩便ならずとて、面々暫く猶豫する内に、與三右衞門が方より、始めて山形へ事の由を註進の飛脚歸りて、仔細なく面々を通し可ㇾ申由、返答なりければ、此上は仔細候はじとて、木戸を開きてぞ通しける。其後、與三右衞門が結構したる事共を、一々に尋ぬるに、立竝べたる數百挺の鐵炮と覺しきは、大方曲木の、其形相似たるに繩に結びて、火繩の樣に拵へ、上の山に旗打立て、大勢の支へたると見えしは、女童共に鉢卷せさせ、或は胴衣帷子を斷々に解きて、此彼の木の枝に懸け、竿の先に結付けて、立置きたるなれば、さても其道に得たる功の老武者かな、暫時の計略に、人々の心を方便りぬるよと、世皆感じ合へり。

諸國の凶徒蜂起の事

出羽・奥州・關東の間は、殘らず内府公へ與し申すと雖も、南海・西海・四國・中國の諸大名は、大方に石田に一味したり。先づ筑前に羽柴中納言殿を始として、島津・鍋島・秋月・相良・有馬・松浦・長曾我部・小西・立花・毛利・宇喜多・安國寺等の人々は、思々に舟艤らせ、家々の旗打立てゝ、津々浦々の便宜に隨ひ、皆大坂へ馳集る。扨又、國々に城郭を固め、楯籠りける人々には、先づ美濃國岐阜の城に織田中納言殿、加賀の國小松の城に丹羽五郎左衞門尉長重、大聖寺の城に山口玄蕃丞、美濃國犬山の城に石子肥前守父子・稻葉右京亮・關長門守、高洲の城に高木某、大柿の城に福原右馬助・相良・秋月・不破平左衞門尉父子、岩村の城には田村中務大輔直昌、信濃に眞田阿波守・子息左衞門佐父子は、最前内府公の御味方に參り、武藏國迄打出でたりけるが、嫡子伊豆守は、内府公の御供しけるに、杉戸の邊にて引分れ、本國へ歸りて、上田の城に楯籠る。大谷刑部少輔は、往昔三成が男色の知音にて、無二の心友なれども、此事兎角延引して

相談せねば、夢にも知らず、內府公の御味方に參らんとて、關東へ下りけるに、三成對面の上、爾々の隱謀に、同志してくれよと賴みければ、刑部少輔、此由を聞きて、是は思の外の一大事ぞ。左迄の事を企つる程ならば、など彼卿を、關東へは下し參らせたるぞ。若しも關東下向の路次にて、兎も角も計はゞ、せめて勝負は半なるべきが、今既に斯る上は、汝等が小思案にて、內府なんどに敵し進らせん事、誠に蟷螂が斧よりも、猶あだなるべし。平に思止り候へと、强ちに意見すれども、いや〳〵、始終の謀をば、爾々に牒じ合せたる上は、何の恐るゝ事か候はん。平樣に同志して給はり候へと、餘儀もなく賴みければ、我は多年癩病に疲れ手曲り、目潰れ、生甲斐なき身なれば、强ちに合戰の勝負を計らふべきにはあらねども、併御邊が由なき事を企て、辛き目を見んずらんと、不便に思へばこそ、斯く迄は會釋するなり。所詮汝が爲に首を晒すとだに思へば、事の僉議にも及ばぬぞとて、終に石田に一味する。此外、長束大藏大輔・增田右衞門尉等に至る迄、皆石田が隱謀に、點頷したる者共なり。又國々にて、內府公へ與し進らする人々の大概には、先づ伊豫國に加藤左馬助嘉明、肥後に加藤主計頭、丹後に細川越中守父子、參河に池田三左衞門尉、竝に田中兵部少輔、大津に京極、加賀國金澤の城に羽柴肥前守利長、伊勢の國安野津に富田信濃守、松坂の城に古田大膳大夫竝に分部左京亮、田丸の城に稻葉彥六、加茂の城に九鬼長門守、尾張國清洲の城に福島左衞門大夫、其外、織田有樂・淺野左京大夫・金森法印・同出雲守・德永法印・同左馬助・有馬法印・同玄蕃頭・山岡道阿彌・同主計頭・池田備中守・藤堂佐渡守・蜂須賀阿波守・生駒雅樂頭・黑田甲斐守・中川修理大夫・龜井武藏守・寺澤志摩守・杉田伯耆守・古田織部佐・稻葉藏人・筒井伊賀守・桑山伊賀守・同左衞門佐・市橋下總守・宇喜多左京亮・丹羽勘助・天野周防守・小出大和守・中村彥右衞門尉・大島雲八・同茂兵衞・別所豐後守・本多因幡守・松倉豐後守・花房五郎左衞門尉・神保長三郎・戶川肥後守・蒔田權之助・石川伊賀守・佐久間久右衞門尉・同源六・同河內守・岡田助右衞門尉・三好將三・同越後守・同新右衞門尉・桑井五郎・舟越五郎右衞門尉・中川半右衞門尉・佐々淡路守・平野權平・同九左衞門尉・落合新八・森惣兵衞尉・能勢總左衞門尉・淸水小八郎・多羅尾久八郎・山口左平太・岡田庄五郎・溝口源太郎・庄田三太夫・同小左衞門尉・柘植平右衞門

尉・山中三河守・堀田權八・福富平左衛門尉・杉原四郎兵衛尉・林丹波守・赤井久兵衛尉・石尾七兵衛尉・成田左馬助・山岡修理亮・伏屋新助・奥山次右衛門尉・加藤平内・渡邊筑後守・長崎半左衛門尉・沼兵右衛門尉・伊丹兵庫頭・村越三十郎・東條紀伊守・甲斐庄喜右衛門等を先として、國々の諸大名、皆内府公の御味方に參り、大方關東へ御供したりけるが、殘つて在國したる人々の許より、思の外、石田が逆變事急なる由、面々早馬を以て、關東へ急を告ぐる事、恰も櫛の齒を引くが如し。されば細川越中守忠興は、今度關東へ下れば、父の幽齋玄旨は、丹後の國田邊の城に楯籠る。烏丸大納言光廣卿は、幽齋の聟なり。今度斯る難儀に迫り、存命更に期し難ければ、古今和歌集の奥秘を書調へて箱に封じ、若し天下反覆して、なからん跡の形見にとて、大納言殿へ送られける。然るに思の外、石田に與したる凶徒等、脆く一戰に討負けて、散々に皆本國へ北げ歸れば、頃ろ田邊の城へ押寄せて、晝夜となく攻むる。小野木縫殿助・赤井・内藤等を初め、打捨てゝ退散す。斯りければ、幽齋不思議の難を免れ、希有の對面に及べは、いづれも打集ひて、いと目出たしと祝儀し、光廣卿、件の古今集傳授の箱

伏見城を攻む

を、其儘幽齋の許へ返されけるとて、

あけてみぬ甲斐ぞありける玉手箱重ねてかへす浦しまの波

とありければ、幽齋、

などてたゞ心へだてゝたま手箱あけてぞ見ぬもうら島の波

此の如く返して、光廣の志を感ぜられしとかや。

伏見・大津兩城落つる事

三成、今度謀叛を起すに付きて、筑前中納言殿の御事は、故殿の御猶子たれば、秋津洲の内、誰あつて疎に存じ進らすべき事ならねば、偏に大將軍の樣に仰ぎ進らせ申さんと、堅く申合せたりければ、扨は自ら手合の軍始めらるべし。さあらば先、伏見の城を攻落して、内府公の御留守なる鳥井彦右衛門尉等を討たんと僉議して、同八月朔日、伏見の城へ押寄せらる。城中にも、事の成敗に付きて、此頃僉議したる事なれば、門々を堅く守りて、今日を最期と防ぎ戰ひけれども、寄手は目に餘る大勢なり。

鳥居元忠自盡伏見城陷る

殊に今度天下反覆の初軍して、諸人の耳目を驚かさんと、四天の力を勵して、息をも繼がず攻めければ、城中、心は猛しと雖も、次第に手負・死人も大勢出來、諸手の警固も疎なれば、彦右衛門尉、今は是迄と思ひ定め、松丸の城戸の側に敷革敷かせ、心靜に鎧脱ぎて、腹切らんとする處へ、寄手の陣の內より、雜賀孫一といふ者、馳入りければ、鳥井是を見付けて、敵に取りても、御邊は誰ぞ。近う寄つて、彦右衛門尉が首取つて、中納言殿に見せ進らせ、御邊が奉公の忠賞に預り候へ。又此は志の侍なれば、吾なき跡にも、必ず手をな指しそと、返々郎等共に言含めて、腹十文字に掻破り、其儘靜々と頭差延べて、雜賀に討たせけるとかや。大將さへ斯る上は、五十餘騎の手の者共、向ふ敵に渡り合ひ、一人も殘らず討死したり。中に杉浦淺右衛門尉といふ者は、先程矢尻を足に蹈立て、其疵切處にて、身心甚だ苦痛し、行歩叶はざれば、下人を近付け、我れ此樣にては、敵に逢ふ事叶はねば、我を扶け行きて、城戸の側に舁捨てよ。攻入る敵に合うて、首取らせんぞと、强ちに言含め、終に舁出されて、城戸の側に座ながら、敵に逢うて討たれけるとなり。又市川茂右衛門といふ者は、眞忠を懷きて、忍びて關東より上り、寄手竹葦の如く打圍みたる中を、今朝程城中へ馳入りて、主の先途の軍に討死しけるこそ、傳へ聞きても、懦夫も志を立てぬべうぞ覺ゆべし。されば關東に居たる鳥井が郎等共、都鄙怱劇に付きて、伏見の事を心元なく思ひ、四十餘騎打連れて、伏見を指して馳上りけるが、路次にて、海道往來の爲體を聞くに、凶徒等堅く關々を差塞ぎて、關東より上る者をば、一人も通さゞる由、沙汰しければ、扨は主もなき此大勢が、遙々と伏見迄上る事、中々叶ふべうも覺えず。所詮是より引返して、子息の京兆へ、奉公の實を盡さんとて、面々中途より引返す中に、件の市川茂右衛門尉といふ者は、鳥井が參河國より以來、年久しく心を免して、仕うたる者なれば、今度如何にもして忍び上り、今生にて今一度、彦右衛門尉殿に見參致し、先途をも見果て進らせてこそ、年來の厚恩を報ぜんと深く思入り、乘りたる馬と下人とをば、傍輩に添へて故鄉へ戻し、唯一人、疲れたる旅人の眞似して上りけるが、刀劍を帶びたる輩と見ては、猶一人も通さゞる由を聞きて、扨は行脚の僧に打紛れて通らんと思ひ、或僧院へ立寄り、心底を翫して、有の儘に物語し、終に髮剃らせ

て、太刀刀、主の僧に布施し、涙と共に立出でて、伏見を指して上る。案の如く關守る武士共、御僧は何國の人、何方へ通らせ給ふや。能々見るに、額の際顯(あらは)に、月額の跡も見ゆるげな。大方案內檢見のしれ者ならんなど、ことぐ〵しく尤め怪しみけれども、些も騷がず陳じければ、そも實の僧ならば、梵字書け、見ん。經讀め、聞かうなど、口々に責むる。彼男、先年出家したる仔細あつて、讀經暗に覺えたれば、辭の下より、經高らかに讀上げたり。扨は疑もなき僧なるぞ、押戻しても用なしとて、仔細なく通しければ、其後は彌兎角陳じ濟して、伏見へ着きけるが、城の爲體、劍戟稻麻の如く打圍みて、中々城へ入りぬべき樣なければ、常に親しう相知りたる商人のありける許へ立寄り、爾々の志ありて、只今關東より上りぬと、事の有增を語り、既に立出でんとするを、主、袖に縋りて、のう是は物に狂はせ給ふか。あの大勢の打圍うたる中を、いかで城へは入り進らせ候べき。其程、長の旅路の疲をも厭はで、是迄上り給ひたるにて、主君報恩の志をば遂げ給ひぬ。迚も髮剃らせし給ひたる御身なれば、世の鎭まる程、暫く立忍ばせ給ひて、殿の御行末をも見進らせ、なからん御跡には、出家遁世の身ともなり給ひて、後の世の御供養なんどこそ、あらまほしう思ひ進らせ侍ると、樣々に止めけれども、いかにも叶ふまじき由を會釋して、其より城の大手へ立寄り、稻麻の如く打圍みたる寄手の面々に向ひ、某爾々の志候て、今關東より罷上りて候。譬ひ某、城へ入り申したりとも、何千騎の助ともやなさん。枉げて某一人を御通し、主の鳥井が命の內に、今一度見參せさせて給ひ候へと、實心の涙を流して、平に嘆きけるに、流石木石ならねば、割なき心樣を深く感じて、仔細なく通しければ、不意に城中へ馳入り、忠死を遂げしとかや。嗚呼忠哉勇哉。又石田市內といふ者も、外より城中へ馳入り、忠死を遂げしとなり。斯くて鳥井が首取りたる雜賀孫一郎といふ者は、元は根來育の者なるが、去る天正十三年三月に、太閤、根來寺退治の時、方々へ落失せたる者共の、前々手柄を顯はしたる者共をば、諸大名の內にて、遍く扶助し置かれけるが、中にも山木錦之助・小路谷右京亮、此雜賀孫市などいふ者こそ、世に隱れなく名を顯せる者共なり。去程に伏見の城、其日の午の刻計に落ちたりければ、中納言殿の勳功、他に異りとて、三成が計ひとして、當座の忠賞に、

兵糧三萬俵進らせたり。中納言殿聞召し、こは如何に、內々は我れ故殿の猶子なれば、偏に我を大將軍と仰がんと約諾したる者の、いはゞ副將の身として、筋なき褒美の仕樣や。熟彼が胸臆を察するに、大將軍に仰がんと我を賺して、腹立せざる事、旣に靜謐の後、秀賴は幼少なり、透間を狙うて、天下を己が成敗せんと思入りたる所存なり。よし〳〵、油斷はせぬものをと、深く肺肝の底に徹して怒られけるこそ、終には三成が運の盡くる禍胎なり。同九月十三日には、西國勢打集ひて、京極が大津の城を、十重二十重に打圍んで、揉みに揉んで攻めければ、京極、始終怺へ難くや思はれけん、寄手へ和を乞ひ、城を出でゝぞ退きぬ。爰に西國勢の內、立花飛驒守宗茂が郞等に、惡魔外道左衞門尉虎備といふ者あり。是は養父道雪より以來、親しう仕はれたる家の子なり。去る天正十五年、太閤筑紫合戰に、岩酌の城攻めさせ給ふ時は、未だ幼少なりしかども、高く聳えたる岸の額にて、敵に無手と引組み、峙ちたる石壁を、上になり下になり轉び落ちて、終に敵を押へて、首搔きたりしより以來、戰場にて度度の手柄を顯はしたる、死生不知の剛の者なりしが、斯く惡魔外道など、あらけなく名乘りて、人の付くべき名ならずとて、時々敎訓せられけれども、侍たらん者の、名を替へ申さんは、何樣折節も候はんものをとて、終に替へざりしが、其日の軍に、宗茂が目の前にて、尋常の人のなし得ぬ輕業の高名したりければ、扨は今日こそ、某が名を替へ申さん吉日を待ち得て候。凡そ輕業は、猿の木渡するに、益さる事は御座候ふまじとて、終に猿渡紀伊守とぞ名乘りける。後の樒林主殿助是なり。去る八月朔日に、中納言殿、伏見の城を攻落し給ひて後は、三成、彌龍拏雲虎風生じたる勢の餘り、面々僉議するは、諸大名の內に、妻子親戚を質に出して、伏見に置き乍ら、內府公の御方人して、關東へ下りたる人々の質共を、無體に請取りて禁獄せば、其事の難儀を勞はり、終には味方になりぬらんとて、面々の屋形々々へ使を立て、何れも質に出されたる妻子親戚達を、左右なく此方へ渡され候へ。さあらずば、目の當り辛き目を見せ侍らんと、日の中に二三度四五度宛、打續きてぞ責めたりける。其上、自然油斷して、質を盜出されては叶はじとて、屋形々々の門每に、堅く張番を置きて、晝夜の境もなく守り居たり。加藤主計頭淸正は、今度三成が隱謀に與せず、內府公

加藤清正家康に與す

の御方人して、肥後に在國せられけるが、質に出して、伏見に置きたる簾中を、如何にもして盗み出し、肥後へ下し進らせよと、宿處へ上せ置かれたる大木土佐守・梶原助兵衛尉が方へ、内通せられけれども、門外には堅く張番を置きて、油斷もなく警固すれば、中々落し進らすべき透もなし。併智謀は、勇士の得たる道なれば、鷄鳴に函谷を開かせ、狐裘を秦庫より偸み出したる風情に、仔細なく彼簾中を落し進らせ、大木・梶原介錯して、肥後の國へぞ遁下りぬ。今其方便を傳へ聞くに、彼梶原助兵衛尉が、天性顏色蒼々として、其樣病人に似たるを、此頃、急病に侵されたれば、宿の藥師の許へ行きて療治さするとて、一日二日に一度宛、駕籠に乘り、夜着・蒲團なんど事々しく引廻し、痛く風を厭ふ樣に見せて、幾度となく出入りける。門外なる張番の者共、始の程は嚴しく過め怪みけれども、誠に彼男、顏色の樣惡くして、痛く風を厭ふ由をいひければ、後には駕籠の戸開く迄もなく、唯下馬の色體する迄にて通しければ、すは今こそ敵を方便り濟しぬるは。此上は如何にもして、簾中を安く落し進らする便ありぬべしと、密に評定して、或日又、件の梶原を駕籠に乘せ、例（いつ）も傍に引重ねける夜着の下に、簾中を深く隱し進らせて、忍び出でんと支度しけるが、誠、猛虎の鬚を狩るよりは、猶危ければ、敵にすはと見付けられなば、即時に簾中を害し進らせ、己も共に腹切らんとて、脇指を脱いて料紙に包み、簾中の傍にぞ置きにける。其上は、大木も、命を限に思ふ程、敵を惱してこそ討死せめとて、梶原が下人になりて、手鑓を被ぎ、例（いつ）よりも猶取靜めて出でけるが、張番の者共、内々の梶原が、只今罷出づるよといふ聲計を誠として、何の仔細にも及ばず通しければ、不思議に鰐の淵〔ロイ〕をば遁れけれども、敵又、河口に關を居ゑて、西國の出船共を僉議しければ、此虎口の難こそ、中々遁れ難う見えたりけるが、内々巧みたる事なれば、船中の用水樽の底板を二重にして、其間へ簾中を忍ばせ進らせたりければ、今少し延々ならば、既に息絶えぬべう思はれけるこそ痛はしけれ。されども兎角して商人船に、用水載に打紛れて、仔細なく河口を出でければ、心安く順風に帆を揚げて、難なく肥後國へぞ着かれける。されば文治の古、源義經、簾中を笈に入れ、富樫が關を遁れ給ひしは、遠き昔語なれば、なき事になんあらぬと思ふ程なるが、目の當り、斯る擧動を聞く上は、誠、勇士の

智謀の程、量り難くぞ覺えける。又長岡越中守の簾中は、明智日向守光秀が娘なり。內々質として、伏見に置かれけるを、敵、平に出し進らせよと、頻並に使を立て、さらずば速に、辛き目に逢はせ進らせんと催促すれば、いかで人手に渡されて、又世に恥をさらさめとて、痛はしや、幼き子供二人を手づから害して後、此程介錯に附添へたる小喜田右衛門を召して、此上は能きに計らひ候へと、惡びれたる氣色もなく宣ひければ、小喜田力なく、落つる涙を押へ乍ら、長刀の鞘外し、一座にて介錯申さんは、君臣男女の非禮なりとて、鴨居を隔て乍ら、泣々簾中の首打落し進らせ、其身も終に腹掻切つて失せぬ。　加藤左馬助嘉明の簾中にも、內々川井與右衛門尉といふ者を、附け置かれけるが、此亂出來たるに付きて、又隨一の郎從河村權七郎を、伊豫より上せられぬ。　此の如く諸大名の屋形々々、人質介錯の爲に附置かれたる郎從共、小喜田が擧動を手本にして、何と責むるとも、堅く人質出すまじき由、懸隔に會釋すれば、敵も、先日小喜田が思切つたるを見て、向後も亦、何樣の異變や出來ぬらんと、物懲し、後にはさまで責めざりしとなり。

郡上城の合戰

處々の城軍の事

筑前中納言殿、先月朔日に、伏見の城を攻落し給ひてより後、西國・中國の軍勢、國々へ亂れ入りて、關東の御方人なる城々を攻むれば、一日として、更に合戰の止む日もなし。　此頃、石田治部少輔、美濃國へ打つて出づれば、當國の住人稻葉右京亮は、石田に一味して、犬山の城に楯籠り、住處郡上の城には、舍弟左近助に、郎從同修理亮等を差添へて、殘し置きたりけるを、金森出雲守・遠藤但馬守は、關東の御味方なれば、此城へ押寄せて、一日一夜手痛く攻むる。　さる程に修理亮、主の左近助に向つていふ樣寄手大勢にて攻め申せば、味方、此無勢にては、迚も墓々しく軍仕るべうも覺えず候間、如何にもして、此城を落ちさせ給ひ、右京亮殿と御一處にて、兎にも角にもならせ給はんこそ、圖に當りて覺え候ふ由を、餘儀もなく勸めけれども、左近助會釋するは、いや〳〵、兄の右京亮殿の、此城の警固に殘されたるを、何と敵、大勢なればとて、故なく此を落失せ、自然路次にて討たれなば、なからん跡の汚名をば、何の世とてか

雪ぐべき。始より此城を枕として、討死せんものをと思ひ定めし上なれば、今更驚くべきに非ずとて、死を一途にぞ勸めける。斯る由、犬山にて、右京亮傳へ聞きて、口惜くや思ひけん、急ぎ郡上を指して引返しけるを、寄手は是を夢にも知らず、小城なれば、案の内に攻落すべしと思ひ、油斷して居たる處へ、不意に寄せ來りて、散々に切つて廻れば、誠、迅雷耳を掩ふに暇あらぬ心地し、前後に辟易する處を、城中より、すは右京殿の後詰し給ふは。急ぎ力を合せて、敵を追散らせとて、同時に城戸を開きて、喚いて懸れば、寄手思の外、前後の敵を會釋し兼ねて、散々に敗北してけり。又犬山の城へも、寄手、大勢押寄せたりけるが、楯籠りたる石子肥前守が嫡子何某、安倍(あへ)なき自害しけるとかや。故を如何にと尋ぬるに、父肥前守、天性貪欲熾盛なる者にて、常に金銀の不足なる事を苦み、財寶の餘あらん事をのみ願ひて、郎等をも扶助し、諸民を撫育する事に、一向愚なりければ、嫡子何某、父が擧動の、利に耽りて義に背ける事を、常々歎き諫めけれども、十日寒レ之而一日暴レ之たる樣なれば、却て父子善を責むるは、害となる事のみぞ多かりける。不意に此亂出で來て、肥前守、此城に楯籠りけるに、一向無勢なれば、嫡子何某、口惜しき事に思ひ、父の肥前守に向つて、恐れ乍ら所存の程を申すにて候。凡そ武士たらん者の、常に郞從を扶持し置き候事、專ら斯る折の用をこそ、期したる事にて御座候。年來筋なき御心樣故、斯程の無勢にては、譬ひ矢長(やたけ)に御心は猛う御座すとも、如何程の事をか仕出し給ふべき。今更返らぬ事を、詮なき申條には御座候へども、某が常々に申しゝは、斯樣の時の用にて御座候ものをとて、深く先非を悔いたりけるを、父の肥前守、つくづくと事の由を打聞きて、さればとよ、武士たらん者の、常に財寶を貯へ置く事、斯樣の時の事に候よ。今金銀を卓散に與へて、大勢を招き集めんに、何の仔細のあるべきぞ。所詮我等が計らひに委せて、得もせぬ道の評判は無益なるぞと、賢顔に高聲して、頓て夥しく金銀を舁出させ、其程々に與へて、浪人を招きければ、不日に大勢は寄り集りけれども、譬へば僅の賃にて、二つとなき命を、交易する法やあらん。既に寄手四方より押寄せ、城の難儀に及びたるを見て、誰よ彼よと、友同志密に誘ひ連れ、五人三人、次第次第に落失せければ、今は狹間の板を空開けて、弓を射鐵炮を打出さん者もなけ

れば、嫡子何某は力を落し、斯くてはいつをいつ迄か命を存へ、由なき恥を掻いて死なんより、一向に自害して、世を早うせんと思定め、父が前へ行きて、幾度申しても、返らぬ事には候へども、常々御心樣の惡う御座し候故、斯樣に事の成來り候事は、何程口惜しくこそ候へと、涙と共に恨めしげに言捨て、頓て己が陣に歸り、大手なる櫓の上へ上りて、挾間の板を押開き、自ら鐵炮二つ三つ放しけるが、是迄とや思ひけん、又玉藥込んで、火挾に火を挾み、咽喉に筒口を押當て、足の大指にて、自ら引金を引落しければ、魂は、鳴行く玉と共に、虛空に消え失せ、二の息もせで伏しにけり。又九鬼大隅守嘉隆は、加茂の城に楯籠りたるを、子息長門守、關東御方人し、押寄せて手痛く攻むれば、終には怺へ兼ねて、熊野の方へ落て行き、自害してけり。去程に、去る八月朔日、内府卿御父子、江戸の御館へ御歸りありてより、福島左衛門大夫・加藤左馬助・田中筑後守・池田三左衛門尉・淺野紀伊守等、國々の大名六七人、竝に井伊の兵部少輔・本多平八郎を差添へ給ひて、御先へ上せられけれども、義濃・尾張の間に支へて、徒に日數を迻り、内府卿の攻上らせ給ふを、待兼ねて居けるが、此頃、村越茂助

を御使として、關東より上せられけれども、何時に江府を御進發あるべしとも仰出されねば、井伊・本多を始め、面々打集りて、密に相談せられける。斯く大勢の、徒に中途に支へ、爲す業もなく日數を送りけるに、御進發の何時とも知れぬこそ、いと心得られね。其事、有の儘披露しては、自然俄に諸大名の心替り、世の中、何樣の變の出で來んも計られず。所詮關東御進發の御沙汰不日なれば、先立つて御邊を御使に差上せ給へり。彌面々、落度の擧動なき樣にして、御進發の日を相待ち申候への由、御諚なるぞと、諸大名の前にて披露候へ。其砌、急に羽檄を飛して、此邊の仔細を、逐一に關東へ註進申し、平に御進發を急ぎ可申候ぞと、強ちに茂助に言含めてけり。其後、諸大名參會して、關東の御下知を承るに、茂助、内々相談に引違へ、關東御進發の御沙汰、未だ何時とも知れざる由を、有の儘披露しければ、井伊・本多の人々を初め、こは如何にと、手して茂助が口を塞ぎぬべう思はれけれども、駟も舌に及ばざれば、爲方なく默然として座せら　其後、諸大名の内にて、面々僉議せられけるは、推量申すに、是れ程大勢の者共が、無二の御味方に參ると雖も、徒に海道に相支へたる計に

て、仕出したる事もなく日を送る事、何樣眞僞の間に付きて、深き御疑のある故なるべし。此上は、福島左衞門大夫が清洲の城を開きて、内府公の御陣に定め、面々は先づ目の前なる織田中納言殿の籠り給へる岐阜の城を攻むべしとて、則ち池田三左衞門尉・福島左衞門大夫・加藤左馬助等、大勢雲霞の如く押寄せ、岐阜の城を攻めたりけるに、中納言殿も、始終怺へ難くや思はれけん、程なく和を乞ひて、此城を退き給ふ。美濃國高洲の城には、高木黨が、僅百騎に足らぬ勢にて籠りけるを、徳永法印・福島左衞門大夫が勢を合せて押寄せ、手痛く攻めたりけるに、高木も亦怺へ兼て退きければ、終に徳永此地を領す。分部左京亮は、伊勢國の邊田といふ處を知行して居たりけるが、其力尫弱なれば、同國阿野津の城に居たる富田信濃守と一處にならんと思ひ、津の城へ行きたりけるを、信濃守、分部が心底の、如何あらんを氣遣ひ、本城へは入れずして、二の丸に置きぬ。此城へも、中國勢大勢にて寄せ來り、盡く民屋を追捕しければ、分部自ら七度迄打出で、地下人等を安々と、城中へ引入れたり。されば左京亮は、其長六尺に餘りて、筋太く骨顯れ、事柄尋常の人に樣替りたる大男なり。先年も、秀吉卿、備中合戰の時、袖懸けて鎧花やかに出立ち、七寸に餘りたる馬の逸物なるを、小跳させて打つて通りければ、前後數十里が間打續きて、雲霞の如くなる軍勢の中に、唯一人、乳より浮上り、大袖のゆらめきけるを、秀吉卿遙の跡より御覽じ、あの先陣に抽んで、大男の見えたるは何者なればと、軍使を立てゝ御尋あり。使歸りて、爾々なる由を申上ぐれば、凡そ日本一の武者なるべしと、御心地よげに譽め給ひしとなり。古田大膳大夫は、同國松坂の城に居たりけるが、間近く敵寄せ來り、富田信濃守が、阿野津の城を攻むる由を傳へ聞きて、扨は力を合すべしとて、侍廿五騎分け遣す。稻葉彦六が楯籠りたる岩手の城へも、九鬼・新宮等が押寄する由傳へ聞き、漸く侍十六騎を分け遣しける處に、はや敵大勢、海道を差塞ぎければ、爲方なく、濱の手に沿ひて急ぎけるを、是にも敵支へければ、時移りて込合ひけるが、古田が郎從小瀨四郎右衞門尉は、手痛く軍して高名しぬ。

岐阜城を陷る
高洲城陷る

九月十五日三成敗北の事

内府公は、江府に御座ありて、凶徒の爲體を聞召されけるに、先立つて關東より上せられたる福島左衞門大夫・加藤左馬助・池田三左衞門尉等、此頃岐阜の城をば攻落し申して候。此上は片時も早く、内府公御父子の攻上らせ給へかし。敵に勢の付かぬ以前に、容易く追散らし申さんと、面々早馬を以て、江府へ急を告げられける。内府公も、彼等が二心なき樣を、能々聞召され、九月朔日に、江府を御立ありて、夜を日に續ぎて攻上らせ給ふ。程なく美濃國に着かせ給へば、折節三成は、當國大垣城に居たりければ、彼城より五六里を隔て、高山の巓に陣取らせ給ひて、御陣を召されけるに、大垣より侍少々打出で、山下へ近々と來りて、御陣の體を見廻りけるに、早り男の若者共、いらつて馳向ひ、少々討たれければ、重ねては敵來りたりとも、一向に罷向ふまじきの由、堅く御制禁を出されけるに、又前の如く敵來りて、馬を輪に乘りて、千鳥懸など馳けさせて、暫く猶豫しけれども、御制法なれば、犯して出合ふ者もなかりけるが、餘りに怺へ兼ねてや、御陣より、弦月の指物さしたる武者一騎、相頭に懸合ふと見えしが、引組んで落重り、暫は起きも上らざれば、山上の味方は、何條勝負の心元なしと、固唾を呑んで見下しける處に、暫くあつて、弦月の指物夕日影に煥きて立上り、首取つて差上げたれば、仕たりや仕たりとどよめく聲、暫は更に止まざりけり。

關ヶ原合戰

後に其名を尋ぬれば、有馬が郎等稻續右近助といふ者なり。同十四日の暮つ方、三成大垣を立つて、關ヶ原へ打出で、明日は未明より、互に雌雄の軍あるべきに定りければ、兩陣安危存亡の間、既に今夜計りになりぬ。明くれば十五日未明より、互に軍勢伍を列ね隊を分つて、面々機を激す。備前中納言秀家は、南宮山に陣を取れば、筑前中納言殿は、赤坂關の邊、小關の峯に取上り給ひて、三成が固めたる陣々をば、目の下に見下して、陣を張られけるが、軍勢一樣に金の弓弦の指物さし、伊吹颪に閃いて、勢の程、幾萬騎やあらんと夥し。此人は先月朔日、伏見の城を攻落されたる時、三成が會釋に付きて、遺恨いと深かりけるを、内府公より、本多平八郎に仰せて、樣々に語らはせ給へば、仔細なく同心せられ、扨は明日三成が軍、半ならんを、かさより能々見濟し、同時に落し懸けて、追散らし申さんと、堅く相圖を定められけるこそ、偏に三成が、運の盡きぬる時節なれ。

九月十五日三成敗北の事

去程に兩方の先陣、互に鬨を作り矢

石田宇喜多等大敗

を射違へ、鐵炮を放し合する程こそ、時移しけれ、相近にもなれば、面々鑓・長刀の鞘外して、散々に入亂れけるが、旣に合戰も半ならんと見えし時、山上なる中納言殿の陣も、少し亂れて、山の半腹迄下りければ、三成が陣にては、此人は内々無二の味方なれば、よも二心御座すべしとは、夢にも知らず、すは中納言殿、味方機疲れたるを見濟し、荒手の大勢にて、入替らせ給ふなるべし。　さあらば讓つて引退き、暫く息を休めんとのみ思ひて、面々引心地付きたる處に、思の外、かさより數千挺の鐵炮を、同時に放し懸け、黑煙夥しく立て、暗夜の如くなる内より、鑓の穗を汰へ、太刀の切先を列ねて、突立て切立て、誠、積水を千仭の谷に決するが如き勢なれば、三成が陣にては、こは如何に／＼といふ聲のみして、四方へ開き靡きて北げ崩れけるを、關東の御陣は、彌機に乘り、喚き叫んで駈破り／＼追散らしければ、凶徒、立足もなく北げ散りて、討たるゝ者、數を知らざる程に、謀叛人の張本石田治部少輔三成・宇喜多中納言秀家は、手の者殘らず討たれ、漸く辛き命を續ぎて、何地となく落失せぬ。　島津兵庫頭義久は、始の程一軍もせで、靜に控へて居たりけるが、思の外、味方軍に討負けたるを見て、迚も叶はじとや思ひけん、手勢引包んで、正丸に打連れ、群りたる敵の中を、少しも擬議せず正直に落行きける。　斯る處に、井伊兵部少輔は、手の者一様に赤鎧着せ、赤母衣懸けたる武者共、其様きら／＼しく出立ち、黑煙を立てゝ追懸くれば、義久、此由を見て、此は正しく井伊兵部少輔と見えたり。「彼は家康公の御内に、大剛の名を得たる死生不知のしれ者なり。　迚も遁れぬ折なれば、待受けて一軍し、討死すべしと思ひ定めて、馬の頭を立並べ、鐵炮を一面に折敷かせて、待懸けたる處へ、兵部少輔猶豫もせず、眞直に進んで懸られけるを、敵、矢長を見合せて、同時に放ちたる鐵炮にて、兵部少輔、痛手を負はれければ、續いて懸る郎從もなし。　去程に義久は、是より直に伊勢路に懸り、大坂指して落行きける。　又大垣の城をば、關東の御方人水野日向守・松平丹波守・西尾豐後守三人、共に手の者大勢引具し、同日の未明に押寄せて、手痛く攻めて軍しける。　此城には、内々三成が計として、牛屋口をば、福原右馬助に固めさせ、東の大手をば、不破平左衞門父子、並に相良・秋月の人々が固めけるを、如何なる謀にてか、平左衞門父子を討つて、相良・秋月の人々が、御味方に參られけれども、牛

屋口をば、福原右馬助が、堅固に怺へて防ぎ戰ひければ、追手・搦手より押寄せたる水野日向守・松平丹波守・西尾豐後守の手の者共、矢場に大勢討死しける。されども相良・秋月が心替し、不破平左衞門尉父子が討たれたる上は、福原も力なく、淺間を指して落行きける。

會津四家合考　卷之七　終

大正四年九月十二日印刷
大正四年九月十五日發行

國史叢書　會津四家合考　一
定價金一圓

不許複製

編者　黑川眞道
發行者　國史研究會
右代表者　小瀧淳　東京市本郷區駒込林町二二四番地
印刷者　橋山定吉　東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷所　友文社　東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所　國史研究會
東京市本郷區駒込林町二百廿四番地
振替貯金口座東京二七〇二四番

SAN-
電話
三

SAN-
電話
三

SAN-AISHA SHOTEN
電話神田二九七五番
三愛社書店